

## 第三部

### 奈良支部創立60周年によせて

奈良支部創立60周年を迎えるにあたり、現在の会員からの寄稿を募集した。しかし当時の資料が見つからない、忘れてしまったと言う声が多く聞かれそれも仕方がないことかと言う思いもあり、少し少なめであるがおよせ頂いた数遍のみの掲載となった。しかしこれらの寄稿文からも、奈良支部の歩んできた一端が垣間見れるように思われる。



## JAUW 奈良支部に所属して

橋本慶子

はじめに：奈良支部発足60周年を経験できることを感謝しています。実は、奈良にいる時にJAUW会員になり、その後、事情あって横浜に転居、気持ちとして奈良を離れ難く、学会等すべて関東に移籍いたしました。せめてJAUW会員としてだけでも奈良に留まりたくこれまで過ごしてまいりました。その間、支部活動に何らお役に立たず、例会にもほとんど参加できないでいました。でも除名もされずこれまで会員として扱ってくださったことを幸せに思います。私的な内容になりますが、お許してください。私が学生時代に、恩師長谷川千鶴先生は「高等教育を受けた女性は卒業後、それを社会に還元する義務がある」と常々おっしゃっておられました。「女性は家庭も育児もこなし、なおかつ男性以上に社会に貢献する働きをしなければ一人前とはいえない」とも。それが1946年（昭和21）にJAUW発会のメンバーとなられた時のお気持ちであったと今思います。

JAUW 奈良支部入会：1967年にJAUWより「研究学徒奨学生」に選ばれ、奨学金を頂戴し、とても勇気づけられました。ご恩返しの意味もあって、一人でも多くの女性研究者がこの恩恵に浴してほしいと思って入会しました。

本部委員会参加：2000年にJAUW第43回総会が奈良で開かれた時、懇親会で前会長田中正子氏に出会い、本部の委員会のお手伝いをするように誘われました。そこではテレビアニメが子どものジェンダー観におよぼす影響とメディアリテラシー教育の必要性、西アジアおよびエジプトからの女子留学生の実態調査、男女共同参画における大卒女性と就労、ワーク・ライフ・バランスの実践に関連して大学研究機関の保育所の問題、女性研究者支援モデル育成事業の実施状況、などの調査研究に参加しましたが、女性の視点からのアタックが不可欠であると実感しました。一例として、女性研究者の割合は調査28カ国中、ラトビア52.7%、米国32.5%に比して日本は11.9%（2006年）ですが、女性の自覚と行動によってこの状況が変化することは、男女両性にとって利益になるのではないかと考えます。

IFUW：JAUW（大学女性協会）はIFUWの傘下にあり、IFUWでは2007年から2010年の活動計画として“Women: Agents for Change Building Sustainable Futures”を掲げています。それはIFUW members, using their knowledge & experience, can be Agents for Changeだから。そして、教育、環境と経済および人権の分野から取り組もうとしています。2010年にメキシコでIFUWの総会が開かれます。青木怜子氏は1998年から2004年までIFUWの会長を勤められました。

奈良支部：奈良県下には国公立を合わせて10大学があります。大学進学率は、1950年（昭和25、短大を含む）女子17.2%でしたが、2009年（平成21）の速報では女子52.8%となっています。JAUWの有資格者は60年前に比べて数倍です。奈良県の地形上、JAUWの催しはどう

しても県北の奈良市に偏りがちになりますが、皆さんが参加できるようになればと希望します。

留学生と日本文化を学ぶ会:留学生に真の日本文化に接して頂きたいと歌舞伎、文楽、茶道、和服を着る会、折り紙、相撲部屋見学、俳句を作る会、また留学生の研究発表会などを催していますが、留学生の入場券や会費は協力会員によってまかなわれています。学ぶ会は東京近辺の大学に留学している学生に限られてしまうのですが、奈良支部にも協力会員がいてくださることは大変ありがたく紙面を借りてお礼申し上げます。



大極殿



朱雀門



平城遷都1300年祭会場建設中  
(平城宮跡)



## 外国人観光客の意識調査

武久文代

1984年夏、菅沼美子支部長のもとで、その年の全国セミナーへの参加課題として、奈良を訪れる外国人観光客を対象とするアンケート調査を実施しました。

調査の方法は、英文のアンケートを作成し、奈良市内のホテルや旅館の宿泊客への記入依頼と、東大寺を始めとする奈良の有名寺社の境内で、観光客に直接面談の上、記入依頼することで、約300人からの回答を得る事ができ、集計結果の分析は、梁瀬先生を中心とする女子大の会員の先生方に担当して頂きました。

主な質問事項は、日本観光についての知識や情報の有無、日本文化についての印象や評価、また観光に際しての要望など40項目で、要望については自由記述としたため、内容も多種多様となり、分類整理するのに一苦労したものでした。旅行中であるのに、観光客のみなさんがかなり詳細なアンケートに熱心に回答してくれたことを今でも有難く思っています。その回答の中で、最も目立ったのは、一般的に観光地や公共施設での英語による表示や情報がごく少ないことへの改善要望でした。その当時は、確かにそのような標記はあまり見当たらなかったようです。その他に、有名な寺社や、美術館等に英語のガイドやパンフレットが欲しいとか、公園内のゴミ箱や、清潔な公衆トイレの設置などの要望が多く見られました。また、奈良観光の特徴でもある宿泊者のための夜の楽しみの方法がないとか、奈良の歴史的景観が損なわれつつあるのを惜しみ、古都としての環境保全の必要性の指摘も見られ、考えさせられる点多々ありました。

これらの集計の報告書は、同年秋の全国セミナーで発表の後、奈良の県・市の観光課に提言として提出、朝日他の新聞紙上で紹介、NHKの朝のローカルトピックスとしても放映されたりしました。当時の奈良の観光環境は、現在に比べればより簡素なものであり、外国人観光客に対する全般的な配慮が不十分だったかもしれません。その後、シルクロード博などを経て、多方面で大きく改善されていますが、奈良支部の提言がどこかで少しでも反映されていたならば嬉しいことと思っています。

今後、望ましいこととして、諸外国から訪れる人々が、市民を交えて自由に交流できるセンターのようなものが設けられたら、国際観光都市としての奈良観光の大きな特徴にもなるのではないのでしょうか。これは、アンケートの回答の中で、観光が単なる見物でなく、その土地の人々の考えや生活を知る交流の機会が持てればとの要望が印象的だったことによります。奈良支部の活動として、この意識調査は、かなり大掛かりなものであり、たくさんの会員のご協力ののもとに実施されたことを思うとき、かつての奈良支部の全盛期の活発な息吹が懐かしく思い出されます。

(Dec. 1. 2009)

(1986年度 支部長)



## 思い出すままに

梁 瀬 度 子

私が当時の大学婦人協会に入会した年度は正確には覚えていないが、1970年代の初め頃だったと思う。私はこれまで会費会員といった存在で全くアクティブな活動はしてこなかったもので、今日までの長い在籍中の思い出を少し記してみたいと思う。

### ☆ 第18回 IFUW 会議後の奈良観光参加者を迎えて

1974年8月、第18回 IFUW 国際会議が京都国際会議場で開催されることが決まり、京都支部が中心となって準備作業が開始された。国際会議終了後の観光スケジュールに奈良見学が計画されていたので奈良支部にも準備会議に出席を要請され、北村君支部長の指示により私がその会議に出席することになり、会議で収集した情報をもとに奈良観光での見学先や昼食会場の選定など旅行社との交渉に当たった。記録では国際会議には内外から約600名の参加者があり、奈良見学にはその内から外国の会員が大型観光バス1台で参加された。正午前にバスが昼食会場の奈良ホテルに到着、奈良支部会員がホテルで一行を出迎え昼食、休憩ののち、支部会員も同行して奈良公園で鹿寄せを行い、公園を散策しながら東大寺に参拝、森本ハル子会員のご夫君森本公誠師のご案内で大仏殿を見学させていただいた。参加者は国際会議の緊張から解き放たれて自然に恵まれた古都奈良での有意義な小旅行を満喫され、午後4時過ぎ帰途につかれた。見学者への支部からのお土産に、被服学専門の辻井康子会員の発案により正倉院宝物の鹿草木夾纈屏風に描かれている有名な鹿の絵を染め抜いた日本手ぬぐい（写真P.16）を贈った。

### ☆ 第25回 通常総会をお引き受けして

1982年3月31日、4月1日奈良において第25回通常総会が開催されることが前年の総会（神戸）で決定した。早速、その年の5月に総会準備委員会が立ち上げられ、代表委員として辻井康子、菅沼美子、武久文代、安田順恵、梁瀬度子の5名の会員が指名された。委員会では土谷澄支部長のもとに総会の成功に向けて準備に取りかかった。先ず総会の運営が円滑に行われるために、会員に向けて募金活動を開始するとともに会員の増強を図ることに取りかかった。また、本部や前回開催の神戸支部に問い合わせるなどして総会開催までのマニュアルを作成、関係機関へも出向いて協力を依頼した。総会会場を奈良ホテルに決定し、観光シーズンを考慮して早期に宿泊施設と折衝、奈良ホテル本館、別館（当時近鉄奈良駅ビル7階に設置されていた）、ホテルサンルートを予約して180名の宿泊希望者が全員泊まれるよう確保した。

総会参加者には古都奈良の雰囲気味わっていただけるよう、懇親会では春日大社に伝わる舞楽“蘭稜王”を南都楽所の方々に演じていただいた。また、お土産等即売コーナーを設け、南都古寺官長方の墨跡、赤膚焼、一刀彫などを販売、参加者に配る記念品として、生駒市高山特産の竹製品で“忙中閑”と命名された竹筒に入った耳かきを特別注文した。さらに食事は、当時の奈良女子大食物学科教授長谷川千鶴会員のご配慮による奈良県特産の素材を取り入れた

料理の数々が呈された。

総会開催が決まったのは土谷澄支部長の在任中であつたが任期中に病に伏され、総会の開催を待たずして1981年11月に他界されたので、前支部長の北村君氏が支部長としてその重責を果たされた。

#### ☆ 新しい支部の体制づくり

1982年4月1日無事総会が終わり、新しい年度に向けて歩み始めた。1980年代における我が国は、少子高齢化が進展して来るとともに女性の社会進出が増加し、国連では1976年から1985年を「国際婦人の10年」として女性の地位向上に力を注いで来た。この間、日本においては第18回IFUWの国際会議が開催され、また、1979年には太平洋地域セミナーが開催されるなど、国際的な活動においても日本の果たす役割は大きくなって来た。そのため、各支部には更なる活動が求められるようになった。奈良支部においても従来のような支部組織や運営方針では十分な活動ができないことが懸念されるようになって来た。

第25回通常総会終了後、奈良支部では新年度を迎えて総会準備委員会のメンバーの中で最年長の辻井会員が支部長に選出されたのを機に、時流に沿った組織作りをするために、支部組織の見直しや規約の検討を始めた。支部活動を円滑にするために常設委員会制をとって各委員会に委員長を置き、それぞれの委員会で任務を遂行すること（支部規約 第8条）、役員任期は1年とし引き続き2年までは再任を妨げない（支部規約 第6条）とした。また、支部長の任務は責任が重く負担が多いので副支部長を置き、内規において「1. 支部長は副支部長を経ること 2. 支部長、副支部長の任期は1年とする」という項目をそえている。これにより、支部長の任期が切れたときには支部長の任につく資格を持つ副支部長が必ず存在することになる。役員任期を最長2期2年間としてこれまで同一人が数年にわたって支部長の重任を勤めてこられていたが、現職を持ちながら支部長を勤めるのは負担が大きかったのでこれを解消し、任期中は意欲的に活動できるような体制をとることにした。この制度は現在に引き継がれている。

(1985年度 支部長)



平城宮跡から春日山をみる



## 大学女性協会奈良支部 60周年に思うこと

奥村 晶子

昭和24年（1949年）に、大学婦人協会の第28番目の支部として発足して、今年60周年を迎えるという。第1回目の支部長は宮本富美先生、そして、奈良支部として第1回目の奨学金を受けられたのが、その時まだ学生だった長谷川千鶴先生であることを知り、支部の長い歴史があるのを実感した。

この周年にあたり“60年史”を発行する運びとなり、作成された奈良支部60年の活動の軌跡を窺える年表を見て、会員の方々のご尽力により創り出されたものの蓄積が如何に大きいかを感じた。活動の一つの講演会では、世界婦人会議；アメリカにおける婦人の社会的活動；在日外国人婦人；女教師；女性センターの役割；夫婦平等；高齢者社会を如何に生きるか；古代女性の生き方など大学婦人協会の目的に合致する題目が精力的に取り上げられている。他方、奈良の地に相応しい、シルクロードと奈良；7・8世紀の都；正倉院御物；大和の仏；お水取り；春日舞楽のような講演も沢山行われていて楽しい集いを思わせる。

振り返ると、北村、土谷両先生に折りある毎にお誘いをいただきながらお受けすることなく過ぎていて、入会はやっと平成3年のことと思う。その年、平井タカネさんが支部長でスイミングエクササイズに連れていただいたこと、また、講演に大阪環境科学部環境科学課長、井上善助氏の名前があることでそう推定する。先生が日本化学会で講演された「食物と廃棄物」という話で、人間が食物を摂取する行為で環境をいかに汚染しているかを認識させられ、是非多くの方に聞いていただきたいと願い紹介した。

第43回通常総会（平成12年4月）を奈良で開催するよう依頼されたのは平成10年のこと。開催前年支部長をお引受し、“何となく会員”では責を果たせないと自覚し、金沢や岡山で開催された通常総会にも出席して、大学婦人協会の活動全容を知ることに努めた。結果、大学婦人協会という国際組織の意義とその中で日本が担うべき役割が構図としては理解できた。支部も頑張らねばと心したが、奈良での通常総会開催時には、中川支部長を中心に支部会員が見事なまでに力を合わせ本当に良く仕事をして、成功裡に会を終えることができたのに感動した。

自身支部長を務めたのは平成10年と、昨年平成20年の二回である。第一回目はイベントとしてサントリービール工場を見学した。桂ビール工場醸造技師長に「ビールとその製造工程について」と題して講演いただいた後、工場を見学、最後に出来たばかりのビールを試飲した。香り高く何とも云えぬ美味さに一同大喜びした。この見学には研究所に勤務していた奈良女子大化学科卒業生に負うところが大きかったが、彼女はビールの“泡”でいい仕事をし、「泡の表面は活性で種々の物質を吸着するが、泡の質・量によって吸着成分が異なるので泡の立て方でビールの風味は大きく変わる。」と述べていた。日頃馴染みのビールについて多くを知ること大切と考えこの見学会を企画した。

昨年度は、支部活動のメインテーマを環境とした。昨今、二酸化炭素排出規制が国際的な課題であるが、二酸化炭素を出さないクリーンな電気エネルギーを産生するとして注目されてい

る太陽光発電について多角的な知識を持っておくことは重要と考え、シャープ葛城工場への見学を願い出た。最近競争の激しい業界であるので見学の受け入れには制約があるのを感じた。太陽光発電の歴史・太陽電池の原理・種類と特性・世界及び日本における設置事例などについて講演を聴き、次いでショールームを見学、有意義であった。

平成20年の2番目には、大阪産業科学研究所で長年にわたり二酸化炭素固定に関する研究を行い高い評価を受けておられる相馬芳枝氏に、「環境科学と女性研究者問題」について講演をいただいた。相馬氏が研究所で男女共同参画室参与として女性問題を検討してこられた経験に基づくお話も興味深く伺えた。

ところで、奈良支部の憂慮すべき昨今の状況は会員数の急激な減少である。平成10年には64名であったが、10年後20年には36名に減ってしまった。会員を増やすことが急務である。奈良支部の特殊性でもあろうが、大学女性協会会員の出身校が奈良女子大学に大きく偏っているのが現状である。会の活動を活性化するための課題の第一は、奈良にある他の大学に積極的に働きかけてメンバーの基盤を多様化することにあると思える。会員の高齢化も、これは全国的傾向と言われているが、若い世代へ入会を勧めることも必須である。多くの方に参加を呼びかけるには、この会が他の会にはない格別の魅力ある内容を持っていることが必要であろう。そのための方策を探ることが今後の課題であろう。まずは、話し合いの場を沢山持って、親睦を重ね、楽しみながら答えを探せたらと願う。

(1998年、2008年度 支部長)



平城宮跡（4月） 桜と朱雀門





## 支部長時代を振り返って

中川早苗

大学婦人協会奈良支部が第28番目の支部として発足して60年目を迎えることができましたことを大変喜ばしく思います。

私が大学婦人協会に入会したのは、今から36年も前の1973年で、母校の大先輩で上司でもあった先生方に勧められたのがきっかけで、翌年京都国際会議場で開催された第18回 I F U W 国際会議に参加された国内外の会員の方々が奈良に見学に来られたおりに、奈良公園を皆の後から付いて行った事をおぼろげながら覚えています。また入会して5年目の1978年には国内奨学生に選ばれ、授賞式に出席するために上京したこと、会場が何処だったかは定かではありませんが、初めてお目にかかる会長をはじめ役員の方々を前に緊張したのを覚えています。

1982年に奈良ホテルで開催された第25回通常総会には、直属の上司である辻井先生が支部長だったこともあって、そうそうたる準備委員の方々のもと下働きをしたことを覚えています。その時の奈良支部のおもてなしの素晴らしさと盛会な様子は、後々まで語り継がれるほどだったようで、あまりお役にも立ちませんでしたが一会員としてお手伝いさせていただいたことを嬉しく思ったことでした。

その後、辻井先生が支部長を務められたこともあって役員を仰せつかり、支部総会や講演会、見学会などに参加する機会が増え、大学や学部を超えての会員との交流が始まり、仕事の合い間にコンサートやレクレーション、リゾート地への小旅行、観光を兼ねての金沢や岡山で開催された総会への参加など、皆さんと楽しく過ごした日々を懐かしく思い出しています。

なかでも私にとって一番忘れがたい思い出は、順送りということでそうそうたる支部長の後を引き継いで支部長に就任した2000年4月に、奈良で第43回通常総会が開催された時のことです。当時奈良女子大学に勤務していた関係で、全学部の女性教官が総出で委員を務めてくださり、まずは募金をつのり、収支の予算を立て、総会および懇親会の会場および参加者の宿泊先の選定、次いで総会や懇親会、見学会への参加の有無や見学先の希望などについての案内状の作成と郵送、続いて参加者名簿の作成や見学先へのバスの手配などなど、今考えるとよくもまあ無事終えることができた感慨無量です。総会後の見学会で一番お世話になったのが薬師寺の安田さんと東大寺の森本さんで、お二人の協力なしには見学会もままならなかったと思います。当時の記録を見ますと、総会には252名、懇親会に180名、薬師寺花会式参詣に168名、三門跡寺院参拝コースに114名、世界遺産コースに34名と、例年になく多くの方々が参加してください、皆さんにとってもいい思い出ができた大変喜んでいただきました。

現奈良支部長から60周年史の原稿を依頼され、総会当時の資料に目を通していているうちに、ご協力頂いたお一人お一人の顔が目に浮かび、総会を無事終了できたのは偏に奈良支部の方々の献身的な協力と連係プレーがあったることと改めて実感しました。遅ればせながらお世話になりました当時の奈良支部の皆様へ改めて心からお礼を申し上げます。有難うございました。

(1999年度 支部長)



## 大学女性協会奈良支部 創立60年史発行に寄せて

関川千尋

私が、大学女性協会の前身である(旧)大学婦人協会に入会したきっかけは、ひとえに奈良女子大学家政学部の北村君先生にお誘い頂いたことにあります。大学院を終了し、新設の家政学部生活経営学科の助手をしていた頃でした。当時の私は、駆け出しで、大学婦人協会がどのような団体で、どんな活動をしているかも、よく知りませんでした。目にとまる形式的な面だけで判断致しますと、入会時、奈良支部の会員は、優に100人を超えており、ある意味で、当支部の全盛期ではなかったかと思っています。

個人的な係わりとしては、入会后間もなく、当支部の若手研究者奨学生候補に推薦していただき、当時の支部長である土谷スミ先生と一緒に、東京で開催された授賞式に参加させていただき、受賞のご挨拶をさせて頂いたことが目に浮かびます。また、土谷先生が亡くなられた直後、当会の通常総会が奈良支部で開催されましたが、北村君先生、長谷川千鶴先生をはじめ、実に多彩な奈良支部の先生方が奈良ホテルに集われ、それぞれの会員の心を一つにした大会を、滞りなく進められたことを、昨日のように思い出します。

私はその後、勤務先が京都教育大学に変わったこともあり、随分長い間、役に立たない会員として、付かず離れずの関係に終始しておりました。

大学婦人協会奈良支部に引き戻され、関係が再開したのは2004年の冬です。当時の支部長である丸山先生から『次年度の役員をするべし』という突然の電話を頂き、結局2004年度の奈良副支部長をお引き受けすることになりました。2005年度は自動的に支部長になりました。2005年4月23日付けで、支部会員の皆様に、ご挨拶をしております。この年、横浜で開催された、第47回通常総会に出席しました。この年は、文科省からの補助金が出ないため、秋の各支部担当の課題研究発表セミナーは開かれないことや、当会の大学女性協会への名称変更が、議題として取り上げられております。奈良支部の会員数でも、当初の1/2以下に減っていることなどと併せて考えると、伝統のある当会も、時代の流れを無視できない状況であったと受け止めざるを得ませんでした。

この年の活動としては、〈大学婦人協会奈良支部の活動について〉というアンケート調査を実施しております。結果は、会の活動を大半が評価しておりました。今後の取り組みとしては、「若い会員を増やす」「会員の高齢化の進展」「…女性協会への名称変更に賛成する」「活動内容の割には会費が高い」「もっとお金を出して社会的活動をしたらよい」「国際的活動など特徴のある活動内容への取り組みを…」などが示されておりました。そして、2006年及び2007年の総会を待って、名称変更が現実化しています。

2009年現在、私は、また、大学女性協会奈良支部の副支部長になりました。支部の高齢化は、更に進展しております。一人でも多くの若い会員を獲得し、時代にあった活動をし、当会の活性化を図りたいものです。

(2005年度 支部長)



## 大学女性協会についての随想

久留島 涼子

私が本協会に入会するきっかけは、故土谷澄先生のお世話により1980年の国内奨学金を研究学徒の部で受賞させて頂いたことである。奈良女子大学に助手として勤務していた時であり、研究用の図書を他大学に依存していたことも有り、その内の数冊を購入することが出来大変うれしかったことを今でも覚えている。それからずっと会員を続けているのもう30年間続いていることになる。最初の間は主として支部活動のみに参加していた。その中で一番印象に残っているのは、2000年に中川早苗支部長の下、第43会通常総会を奈良支部で担当したことである。2年程前から何回も会議を開き、こまごまとしたことまで吟味していき当日までに疲れぎみであった。当時私は会計を担当しており総会の前何日かは深夜まで書類作りやお金の計算に追われていた。総会当日は多くの方に参加して頂き、皆さんにこにこ顔で帰られた時には奈良支部会員全員は安心してその後1、2年の支部活動は低調であったように思う。その後2001年に支部長が回ってきたが、かろうじて活動として全国セミナーの為に近畿圏の大学の学長にアンケート調査を行い、「女性のエンパワーメントと大学」と題して宇佐見香代さんに発表していただいた。その時初めて国立女性教育会館に行ったが、東京から遠いことと言ったらなかった。東京まで飛行機で行ったのも誤算の一つであった。池袋に行くまでも時間がかかり、さらに池袋からの私鉄電車の中で日は暮れるしなかなか着かないし心細かったことを思い出す。今年もこれから行くことになっているのでそのつもりが重要かと覚悟しているのだが。最近の活動としては4月または5月に行なわれる通常総会に出ることが年中行事の一つになっている。大学を定年退職したので何時も参加していた春、秋の学会に参加しなくなったので特に地方で行なわれる総会には色々楽しみがある。その一つは、大学女性協会の一年間の活動や次年度の活動方針が分かり、支部の活動の方向性を見つけることができることである。また他の楽しみの一つは懇親会やバスツアーで全国から集まった優秀な女性の方とお話が出来たり、その土地の食材を味わいまた珍しい物を見学できること等がある。現在の奈良支部会員数は37名程度であり、なかなか支部独自の活動が出来にくいことも有り本部の方針に添って活動することである程度有効な活動と結びつけることができるように思われる。伝統ある大学女性協会、そして奈良支部の活動の灯火を消さないように次世代へバトンタッチできれば良いなと願うこの頃である。

(2001、2009年度 支部長)